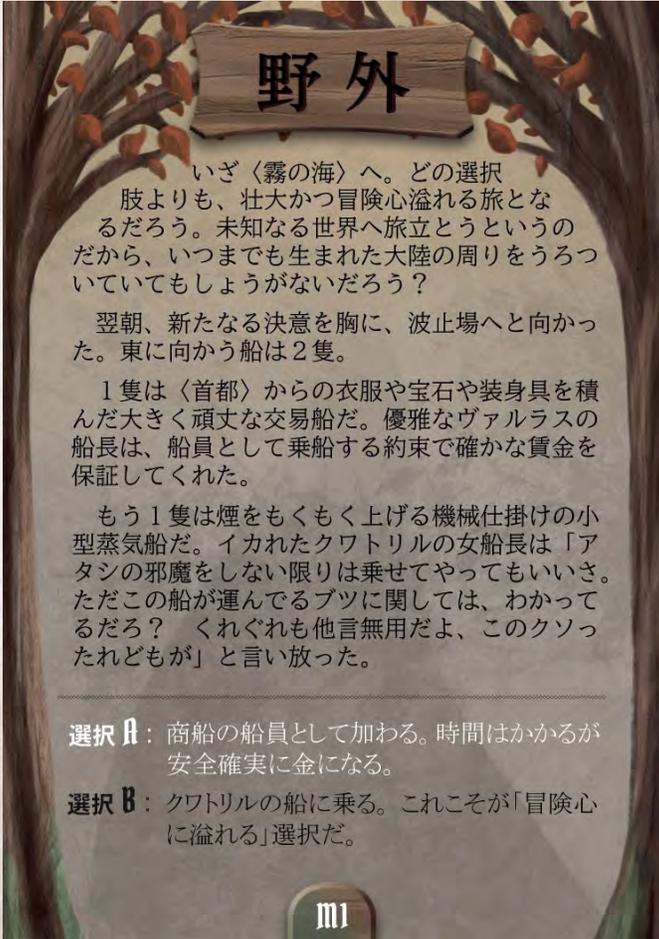


どこで冒険を求める？

- ① 北方の凍てつく銅頸山脈を目指す。
- ② 西方のにぎやかな〈首都〉を目指す。
- ③ 南方のヴァルラス砂漠を目指す。
- ④ 東方の海洋を目指して船に乗り込む。
- ⑤ ああ、面倒だ。冒険なんか街の周囲に落ちてるじゃないか。



野外

いざ〈霧の海〉へ。どの選択肢よりも、壮大かつ冒険心溢れる旅となるだろう。未知なる世界へ旅立とうというのだから、いつまでも生まれた大陸の周りをうろついていてもしょうがないだろう？

翌朝、新たなる決意を胸に、波止場へと向かった。東に向かう船は2隻。

1隻は〈首都〉からの衣服や宝石や装身具を積んだ大きく頑丈な交易船だ。優雅なヴァルラスの船長は、船員として乗船する約束で確かな賃金を保証してくれた。

もう1隻は煙をもくもく上げる機械仕掛けの小型蒸気船だ。イカれたクワトリルの女船長は「アタシの邪魔をしない限りは乗せてやってもいいさ。ただこの船が運んでるブツに関しては、わかってるだろ？ くれぐれも他言無用だよ、このクソったれどもが」と言い放った。

選択 A：商船の船員として加わる。時間はかかるが安全確実に金になる。

選択 B：クワトリルの船に乗る。これこそが「冒険心に溢れる」選択だ。

選択肢: クワトリルの船に乗る

目的: 片耳パーティを倒す

序幕:

船倉にあるものについて尋ねても、船長ははぐらかすばかりだ。蒸気機関は異様な煙をモクモク噴き、ガタガタ音を響かせ続けている。これら全ての状況が「この船から降りるべきだ」と理性に訴えかけているが、どういうわけか諸君の冒険者としての嗅覚は、より危険な道を選んでしまうのである。

船長であるドレイルという名のクワトリルの態度は、やけにつっけんどんだ。そのわざとらしさのせいで「実は自分たちの乗船を喜んでいるのだ」と合点がいった。錨を上げ、轟音と共に出港を迎えると、そのしかめっつらはもう笑顔にしか見えなかった。

「アンタたちを乗せることができ、ちょっとは運が向いてきたかもネ」ドレイルは言った。「おかげで不測の事態に備えることができるのだわサ」

「不測の事態」とは何を意味するのか？ 追求しようとする、ドレイルは「さて、なんでアタシが密輸なんかやってるト？」と話を逸らし、自身の半生について長々と語りだした。ドレイルは親友のルースと共に、片耳パーティという名の人間の男の部下として、蒸気船の機関部を組み上げ、その修理も担当していたという。おかげでパーティは捕まることもなく、戦においては負け知らずだった。

そんなわけでドレイルとルースは愉快にやっていたが、それとある激戦で機関のひとつが破壊されるまでのこと。船は敵に乗り込まれるままそこに残し、命からがら脱出した。おかげで多くの部下を虐殺されることになったパーティは、大事な蒸気機関を守れなかった罰として皆の前でルースを処刑し、その死体を海に投げ捨てた。

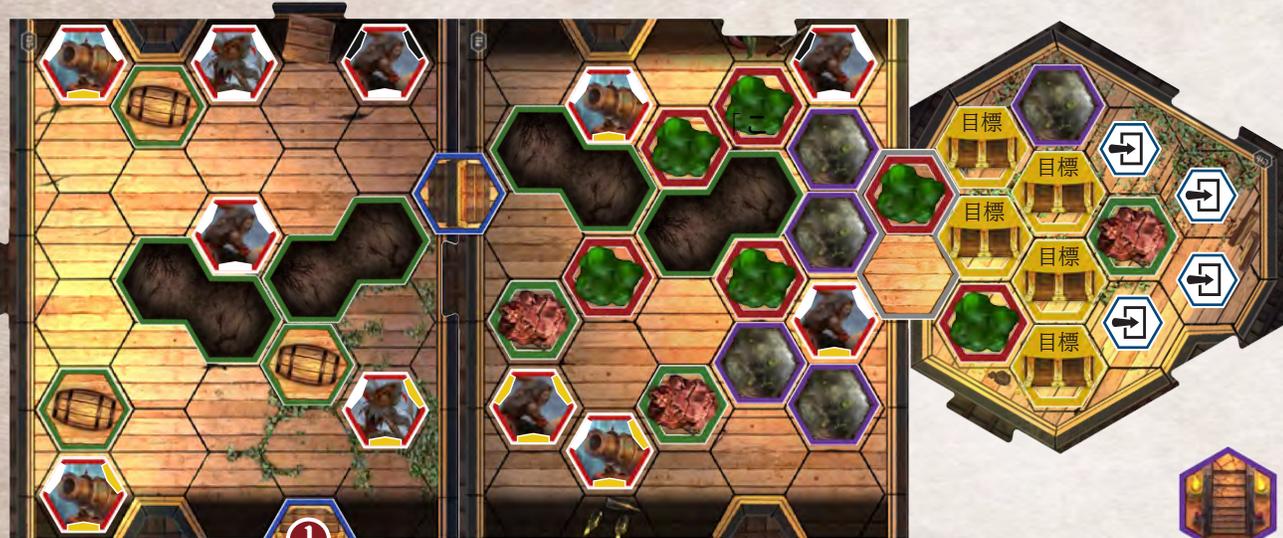
そう語るドレイルは、怒りで身震いしていた。「可哀そうなルース……刃が喉元に

吸いこまれるのを、アタシはただただ見ているしかなかった。あのコが血塗れで甲板を転がりまわっているとき、アタシはただ叫んで、叫ぶだけで他に何もできなかった」

それから、いかにしてパーティの船から逃げ出したのかについて語り「だからこそ今日というこの日まで、復讐の計画を練りあげてきたのサ」と説明した。

不意に、胸の内に抱いていた違和感の正体に気づかされた。通商湾を離れてからというものの、この船は本来の進路から外れているばかりか、ジグザグに進んでいる。まるで何者かを狩りたてているかのごとく！

「そら、悪党はもうソコだよ」いきなりドレイルは吐き捨てた。「あの間抜け野郎ったら、ここ数年、巡回航路を変えてないんだわサ」水平線上に、小さく白い帆を見つけた。ドレイルは出力を全開に



使用する
地形タイプ:

- C1b
- 11a
- 12b
- A1b
- B2a



-  盗賊の射手
-  盗賊の衛兵
-  古代の大砲
-  宝箱 (x5)
-  毒と負傷の罠 (x6)
-  海水 (x5)
-  階段 (x3)
-  巨岩 (x3)
-  樽 (x3)
-  飾り柵 (x1)
-  暗黒の陥穽 (x4)
(破壊不能)
-  陳列棚 (x2)

した。その白帆は一気に大きく迫ってくる。蒸気船はそのまま加速を続け、やがて恐怖で見開かれた諸君の目にも、敵船の甲板で右往左往する男たちの姿がはっきり見えるまでになった。相手もまた、恐怖に震えているようだった。

砲撃の爆音が空を切り裂いた。熟練のドレイルは、うまく船を回避させた。諸君の船はより小型で、兵装もなきがごとしだったが、ドレイルは全く動じていない。

絶望にかられ「どうするつもりだ？」と問い正したが、ドレイルは強い意志を宿した瞳で正面を見据えつつ、淡々と宣言した。「たとえこちらが全滅するにしても、あの悪党は沈めてやるんだわさ」

その無謀な計画を諷めるいとまもなく、ドレイルは何かのスイッチを押し、諸君は床へと投げ出された。死の罠と化した蒸気船は、驚嘆すべき速度で前進を続ける。ドレイルの巧みな操舵によって、敵大型船の船尾へと突っ込んでいく。ただただ衝突に備える態勢をとるしかない。すぐさま二隻は激突し、世界は真っ白になった。

視界が戻ったとき、目の前には混沌とした光景が広がっていた。ドレイルの船の船首は粉々になったが、相手の大型船の船尾に大穴を開けることに成功していた。そこからの浸水は既に危険な量となっている。二隻の衝突した辺りには、曲がった金属とばらばらになった木片が散乱し、壊れた蒸気機関から発生した汚染ガスの臭気が一面に広がっていた。

「爆弾を」傷つき倒れ伏したドレイルは、そこでせき込んだ。「アイツらを逃がすわけにはいかないヨ……ソレを使って……パーティを殺して……」

衝撃によって、中央の容器からこぼれ落ちたとおぼしき大量の小型爆弾が、確かに甲板の上に散乱している。このクワトリルの心につきあう気など毛頭ないが、そろそろ敵船員も衝突の衝撃から回復しつつある。そして、この事態を歓迎しているわけもない。ひょっとするとこの爆弾は、けっこう役に立つかも知れない。

特別ルール:

略取した宝箱は、キャラクターボード上に置いて下さい。各宝箱は〈爆弾〉です。自分のボード上に〈爆弾〉があるキャラクターは、上ボックスの実行をやめる代わりにその能力カードを捨て札にして、〈爆弾〉を投げることができます。そうするなら、キャラクターボード上の〈爆弾〉を取り除いて「攻撃6、射程4」のボックスを実行するか、射程4以内の障害物1つを破壊します。

1

がれきの中で動かぬドレイルを残し、諸君は敵船の上層への階段を目指した。密輸入のほとんどは既に始末されていたが、歯向かって来る骨のある輩も少しは残っていたのだ。

特別ルール:

②の扉は施錠されており、破壊によってのみ開く物標です。HPは10ですが、他の障害物のように〈爆弾〉で破壊することもできます。

2

破壊された戸口を抜けて身を滑らせると、ひとりの盗賊が、慌てて机の上から武器を手にした……片耳パーティだ。

「この終わりなき復讐地獄まで、のこのこやって来た間抜けどもとは、お前らのことか？」パーティは叫んだ。「俺の愛しきクワトリルが舞い戻ってきたことにも驚かされたが、その自殺行為に手を貸す傭兵がいただなんて、いったいぜんたいどうやって口説き落とされたんだ？ 正気を疑うぜ」

「なににせよ、お前らはみんなお人好しの間抜け野郎だ。俺にとっちゃあ、ちょうどこの船を降りる潮時だったのさ。そしてお前らは、この船もろとも沈めてやる！」

特別ルール:

この盗賊の衛兵（上級）は、密輸船の船長・片耳パーティです。（通常の装甲1に加えて）さらに装甲1が付与されます（合計装甲2）。HPは $(H \times C) / 2$ （端数切り上げ）です。Hは盗賊の衛兵（上級）のHPです。

終幕:

最後の一撃で、パーティは一声うめき、膝立ちになった。まだ息があり、命乞いをしてくる。だが諸君が何らかの行動に移る前に、底部からの大爆発が船を大きく揺さぶった。竜骨が裂け、崩壊が始まる。

ついにドレイルが自爆装置を起動したのだろう。状況がさらに悪化する前に、脱出する必要がある。パーティの船室の壊れた船窓から外を見やると、水平線にかすかに小島の姿が認められた。陸へと戻るには、この沈みゆく帆船から何とか救命ボートを見つけ出さなくてはならない。もはや一刻の猶予もない。諸君以外には何かひとつ……あるいは誰かひとりしか連れて行くことはできないだろう。

報酬:

アイテム033番〈揮発性爆薬〉2枚
各人 15XP ずつ